

# 花の歌

## 歳時記

前田康子

以前暮らしていた家の小さな庭に、山茶花と椿の木があった。冬、その木にときどき目白がやってくるのを見つけた。そこで、みかんを半分に切ったものを枝にさしておくと毎日のようにとまって食べてくれる。

嬉しくなり、次は素麺の木箱で作った餌台をとりつけ、向日葵の種を並べておいた。すると四十雀が飛んできて上手に種を割って食べている。鶉がきて邪魔をする日もある。ヤマガラも飛んできた。ヤマガラは、色のはつきりした鳥で、なつけば、手のひらから餌を食べるといふ。手のひらに餌をのせて、何時間もねばってみたことがある。

野鳥のかわいらしさを初めて知った。何年前かに、高安国世氏の信州の別荘にお邪魔したことがある。そのとき高安夫人が、窓の外を見て「娘がこの林でフルートを吹くと、たくさん小鳥が集まってじつと聞いているのよ。」と話して下さった。うっとりするような話だったと、今でもときどき、思い出す。



## 梅

梅の花は、咲いたか、まだかと焦るような気持ちで毎年、待っている。新聞に各地の梅便りが載ると、楽しみに見る人も多いだろう。花よりも、香りが、咲いたことをまず教えてくれる。

梅園や、植物園の梅も見事だが、畑の端に一本咲いているのや、古いお寺の庭先に咲いているのもいい感じである。

### いづこにも貧しき路がよこたはり神の遊 びのいづく白梅

玉城 徹『馬の首』

『馬の首』冒頭の一首。数多くある梅の歌で一番にあげたい歌である。神聖で、静かで、そして、安堵のようなものが白梅の花に込められている。春を連れてきた、大いなる神の手が見えてくる。

### 紅梅にさきがけて咲く白梅のただに寂か なるひかりをまじふ

安立スハル『この梅生ずべし』

万葉の時代に咲いていた梅は、ほとんどが白梅であり、紅梅の歌は一首しかないらしい。現代ではたたくさんの園芸種が生まれ、「思いのまま」や「月の桂」など名付けられている。「思いのまま」はその名の通り、一本の

木にさまざまな色の花が咲くという。

### 善悪の善なる梅の咲きそろふいやな季節は過ぎゆきにけり

岡井 隆『親和力』

数多くある梅の歌のなかで、ちよつと異質な感じのする歌。梅は清楚で、文学的にも歴史ある花である。でもあまり、梅ばかり誉め

るなよと言っているようで面白い。

### 我妹子が植ゑし梅の樹見ること心咽 せつ涙し流る

おのおのふひと  
大伴旅人『万葉集』巻三 四五三

『万葉集』の梅の歌は、春が来た喜びや、恋の歌が多いが、これは挽歌である。旅人は、五十代に愛妻を亡くした。



## 蠟梅

梅はバラ科であるが、蠟梅はロウバイ科というまったく違う種である。鎌倉の小さなお寺の庭で、はじめて見たのは、花の中まで黄色い素心蠟梅。うつつきがちに枝について

て、つやつやとした黄色は本当に蠟を思わせるものであった。

しらじらと障子を透す冬の日や室に人なく臘梅の花

窪田空穂 『青朽葉』

## ろうばい 蠟梅

このごろは障子のある家も少なくなってきた。障子や床の間があるから似合う花は多くある。蠟梅の匂いは蘭の花の香りに似ているという。冷えた部屋の中に蠟梅の匂いが立ち込める。

臘梅にいささかの雪積みたれば雪の間よ  
り臘梅匂う

永田和宏 『嬰庭』

蠟梅は梅よりも早く咲く花で、旧暦の十二月頃（臘月）から咲くので「臘梅」。もしくは蠟細工を思わせるから「臘梅」と表記も好みによって違う。この二首はどちらも臘梅である。

雪が降り、凍るような冷たさの中で咲く花。その強さからはほど遠い、ちいさい暖かな色の花である。

蠟梅の黄色のしづく夕光に身ぐるみ透  
けてひとつ火ともす

玉井清弘 『清連』

蠟梅の花、ひとつぶをじっと見ている歌。二月から三月は、黄色の木の花が次々と咲く。蠟梅はその中でもとりわけ早くから咲き、このうたのように陽の光に花が透けている。



## ヒヤシンス

ヒヤシンスの水栽培をしたのは、何年生の頃だろう。球根からだんだん白い根が伸びてきて、あつという間にガラスピンが根だらけ

になり、芽が出てくる。何も世話をしなくて育てられるから、今年もひとつだけ窓辺に育てている。

朝ご飯を食べるときに観察する。春が近づいたり、遠のいたりしているのをガラス壺の

中の朝日の光で感じている。

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心  
頭（おも）ひそめし日

北原白秋「桐の花

二階より君とならびて肩ふれて見下す  
庭のヒヤシンスかな

木下利玄「銀

この二人、白秋の方が一歳年上で、この歌の制作時と同じ十代後半頃である。ヒヤシンスが入って来たのは幕末。やはり出したのは明治になってからだから、新しい恋の歌には格好の材料となったわけだ。

ひやしんす条約交わししゃがむ野辺あか  
むらさきの空になるまで

東（あ）直子「春原さんのリコーダー」

ヒヤシンスの名はギリシャ神話のヒュアキントスから来ているが、漢字で風信子と書いたり、この歌のようにひらがなで書くことやさしい響きが伝わる。

「ひやしんす条約」なんて楽しそうな言葉。小さな女の子が集まって、ひっそりと遊んでいるような不思議な歌である。

まえだ・やすこ「塔」会員



ヒヤシンス